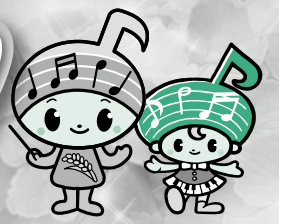
郡山青年会議所報 Junior Chamber International Koriyama

vol. 609

Plus ultra!!



公益社団法人郡山青年会議所 2023年度スローガン

Challenge a new era, and change the future!

～新しい時代に挑戦しよう、私たちが夢描く最高の未来へ～

特別対談

福島レッドホープス代表取締役兼監督 岩村 明憲 様

福島ファイヤーボンズ代表取締役社長 西田 創 様

芝田銀平理事長(以下、芝田):本日はシーズン中お忙しいなかにもかかわらず、本対談にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。早速ではありますが、本日は「地域スポーツが子どもたちの未来を変える」というテーマの基、アフターコロナという新しい時代を迎えるにあたり、地域のプロスポーツチームと共に日常的にスポーツにいそしむ場を創造し、地域の子どもたちが夢や希望を描ける持続可能な地域をつくるために、過去・現在・未来の時系列で意見を交わしていただければと考えております。それでは、対談へ移らせていただきます。まずは過去ということで、地域におけるこれまでの取り組みについて、お話しいただきたいと思います。岩村様よろしくお願いします。

福島レッドホープス代表取締役兼監督岩村明憲氏(以下、岩村):そうですね。自分と福島県との繋がりに震災がありまして、自分もメジャーから戻ってきた年が二〇一一年楽天イーグルスに在籍した年でした。あの年に震災を経験していなければ、おそらく今はないと思っていますが、震災をきっかけに、宮城にいた自分から福島県がどういう現状なのかを考えながら、現役を続けてまいりました。現役のうちは、自分のプレーで被災された方々をとにかく元気にさせようという気持ち一つでやってきましたが、震災から三年が経ち、福島レッドホープスという前身のチームができて、知れば知るほど福島県の内情というものが、何とかしなければいけない状況であったと感じました。実際に災害を経験してしまったり、後に風評被害を受けてしまった福島県内の方々がいたりということでより強く感じました。私達の目的の一つとして、独立リーグで自分たちが他県に行った時に福島という地名を出し、その地域の方々に福島に対してより親しみを感じていただいてまた福島に遊びに来てもらうというものがありました。もちろん県内の子どもたちのことも考えれば、外で遊べない時間が長過ぎたために、社会問題になっている子どもの肥満の問題であったり、何かスポーツをしてほしいという思いで、風評被害を含めて、今この時も過去に入ると思いますが、さらに強い気持ちをもって取り組んでます。福島のために自分たちに何ができるかということ全てが答えではないと思いますが、日々その答えを模索しながら活動をしてきました。

芝田:二〇一一年当時は私も被災したのですが、福島においてはまだまだ復興途上だと思いますので、今後とも復興のための支援をぜひ一緒に意識していければ幸いです。続きまして西田様よろしくお願いします。

福島ファイヤーボンズ代表取締役社長西田創氏(以下、西田):はい。私も岩村さんとすごく重なる部分があって、ファイヤーボンズも震災をきっかけに立ち上がったバスケットボールチームです。B.LEAGUEが全国に五十五クラブありますが、その中で震災をきっかけとして誕生したクラブはファイヤーボンズだけなんです。ですのでそこから生まれたプロクラブが地域の復興のシンボルとして町を盛り上げることによって地域が賑わっていく、復興していくという姿をイメージしながら、活動を続けてきました。ファイヤーボンズを創ろうということが先に

来たわけではなく、子どもの肥満という社会課題に向き合うために、室内競技であれば取り組んでいただきやすいということで、当時の運営母体である学校法人さんからの発案で体育館でのバスケットボールスクールを立ち上げました。初めはボール遊びに近いレベルだったと聞いています。その翌年に、子どもたちの夢や希望となれるように立ち上がったのが福島ファイヤーボンズです。私達も今九シーズン目を戦っていて、来シーズンでちょうどリーグ参入から十周年になります。

六年前にユースチームを立ち上げ、スクール事業に加えて下部組織として子どもたちのチームを持って子どもたちの育成事業を始めました。今年三月のB.LEAGUEの全国大会では、アンダー15の女子チームが全国優勝でき、一昨年には男子が銅メダルを獲得しました。ファイヤーボンズのトップチームよりも先に全国の舞台で子どもたちが輝いた形になりましたが(笑)、子どもたちに目を向けてしっかりと育成してきたことで、ユースチームが全国でも活躍できるようになりました。これはひとつの成果として積み重なってきたと考えています。ユースチームは福島県の子どもたちで構成されていますので、福島の子どもたちでも鍛えていくと、ここまで行けるんだと子どもたちもその親御さんも自信になったのではないかと思います。また、浜通りで震災以降にできた楢葉町にある楢葉スカイアリーナという場所がありますが、このアリーナを使って公式戦を初めて開催しました。そのアリーナを拠点に活動しているミニバス少年団は三人からのスタートでしたがそこにファイヤーボンズが指導連携させていただき活動を続けてきたことで、今では二十人以上のチームになりました。何もしなければ子ども達のコミュニティも継続できていたか分かりませんし、夢も潰えていたかもしれません。地道な活動ですがこのような直接的なアプローチを続けてきました。

芝田:郡山青年会議所も、主に小学生を中心に、子どもたちの思いやりや協力することの大切さを伝える事業を行ってまいりました。特にキャンプ事業については、新型コロナウイルス感染症で中止になってしまいましたが長年にわたり取り組んでおりまして、市民にも広く認知されております。スポーツについては、コロナ禍前の二〇一九年に、スポーツと音楽を融合するをテーマにユニバーサルフェスティバルという事業を行い、元ラグビー日本代表の大野均氏をお呼びし、スポーツで人と人をつなげる素晴らしさをお話しいただきました。また、二〇一五年には元サッカー日本代表の城彰二氏をお呼びし、親子でサッカー教室を行うなど、様々なスポーツ事業を取り組んでおります。いずれの事業も体験して学ぶことを重視して事業を行ってまいりました。次に、二〇一九年に新型コロナウイルス感染症がまん延してからコロナ禍における苦労などについて、お聞かせいただければと思います。西田様、よろしくお願いします。

西田:どのスポーツチームも苦労されたと思いますが、一番は集客です。B.LEAGUE全体としても収容制限というものがかかりましたので、すごくお客さまを呼びにくい状況になりました。一人ひとりの体温測定や、離れて座っていただく等のルール上の制限がかかってしまったので、お客さまにもすごく煩わしい形になってしまったのかなと思います。来場者数の減少はやはり一番インパクトがありましたね。また、私達の活動にはスポンサー様のご協力が必要不可欠になりますが、中にはコロナで苦しいから継続が難しいという企業様もありました。私が経営に携わるようになった年に、三十社ほどスポンサーから離脱されたことを覚えています。お客様のメンタル的にも、スポーツってわざわざ現地に行かなくてもいいよねというようなスポーツ離れのマインドが浸透してしまったことも大きかったと思います。

芝田:集客については私達も平常通りに開催できる事業など一つとしてなく、大変苦労した記憶がございました。続きまして岩村様、よろしくお願いします。

岩村:そうですね。同じような問題で悩まされたこともありますし、このチームの存続をさせるために、何とかはいつくばって経営をしていく中で、いろんなことを考えながら取り組んできました。私達は、とにかく無観客でもいいからやろうというところに至った経緯があります。無観客の状態で野球をしていく中で、リーグ全体の取り組みでYouTube放送をしっかりとしたコンテンツの一つにしてやっていきましょうということが決まりました。もちろんファイヤーボンズさん同様にスポンサーの厳しい反応を見た時に、なかなかお願いはできないんですけれども、会社としても大きく出ていかなきゃいけないところもあったんです。あの時私達は体育館ではなくて外の球技だからというところが利点であったりはしましたが、一度無観客で試合をしてしまうと、制限を解いてもなかなかお客さまが戻ってきてくれなかったのが現実としてありました。ようやくファンの方々含め、県民の方々のフットワークも軽くなって、少しずつ球場に足が向くようにはなってきたとは思いますが、この三年間での印象がまだまだ拭い去れてないと自分自身は受け止めています。なので集客に関しては、どのスポーツ団体においても同じような悩みがあるのではないかなと思っております。

芝田:私たち郡山青年会議所も人を集める事業を中心に行ってまいりましたので、非常に苦しかった事を覚えております。今ならリモートで運動教室等を行えたかもしれませんが、当時はまだまだ一般的ではなく、思うように活動ができない時期が続いておりました。また、小学生の相撲やサッカーの大会といった事業が軒並み中止となってしまい、それを目標に頑張ってきた子どもたちが出場できないと思うと残念な気持ちになりました。そんな中、コロナ禍の二〇二〇年に感染症対策を行った上で親子でのサイクリング教室を行った時に、久々に屋外で子どもたちの笑顔が見れたことが、非常に嬉しかったことをよく覚えております。

それでは、次の質問にいきたいと思います。コロナ禍を経て、アフターコロナという新しい時代に、本年度どのような取り組みを行っていくのかお聞かせいただきたいと思います。岩村様よろしくお願いします。

岩村:そうですね。突然大きな花火を打ち上げるというのは正直難しいですが、何か大きなことをやらないと今まで通りだと思います。僕自身の考えでは、復興というものは人それぞれの価値観による基準があると思うんです。どこまで来たら復興なのか、これで復興できたのか、完全に復興してるって言えるのかっていうのは、おそらく人それぞれ違うと思います。なので、コロナ禍においてもアフターコロナになった今も、新たにいろんなスポーツ事業を通じて地域を活性化させ地域創生へ繋げていく答えがなかなか見つからないところでその価値観を押し付けることもできないですし、色々な価値観を共有しながらやっていかなければいけないのが現状だということを感じております。コロナ禍でスポンサー収入のほうも減ってきている中で、大きなイベント

の資金源がないという実情ですが、やらない訳にいかないといったところで、改めて自分が色々な方々とプライベートも共にしながら、新たな花火を打ち上げられたらいいなと思っております。そのためには郡山の方々を含め福島県民の皆様のご協力がなければ絶対成し得ないことだと思いますし、福島県民の方々のためにやってるのであれば、共存共栄という言葉をモットーに、これからも活動していきたいと思っております。

芝田:続いて西田様、いかがでしょうか。

西田:はい。先ほどYouTube配信というお話がありましたが、コロナ禍でバスケ界でも映像配信が充実したりTwitter、Instagram、TikTok等のメディアコンテンツを充実させる事に注力してきました。しかし逆行するようですが、私はそういうものが整ってきたからこそ、「リアルの接点」というところをとにかく大切にしていきたいと思っています。子どもたちは選手とリアルで触れ合うことで目をキラキラ輝かせてくれます。私自身ももっと地域に出向いていきたいと思いますし、街中の広告を増やしているのも、実際に目に触れる場所にいかにファイヤーボンズの露出をするかに拘っているからです。子どもたちも新型コロナ感染症でリアルの経験が失われてきたと思いますのでこれからも積極的にイベント開催や出演協力などさせていただきたいと思っております。

芝田:コロナ禍の三年間は多くの子どもたちが仲間と協力して挑戦する機会が奪われてしまいましたので、私達もチームスポーツに携わっているお二人のお力やお知恵をお借りしまして、スポーツという体験を通して仲間と協力することの大切さを伝えていきたいと考えております。

次に、子どもたちの未来についてお話していただきたいと思います。子どもたちが夢や希望を描ける持続可能な地域について、子どもたちにどのように成長してほしいのか、お聞かせいただければと思います。西田様、よろしくお願いします。

西田:すごく難しい質問ですが、自分の夢や目標に早く出会い、とにかく邁進して欲しいと思います。昨今ＡＩが急激に発達していますよね。それにより知識レベルが均一化するだけでなく、これまで大切とされていた課題解決能力すらもＡＩが補完してくれる現実がきていると思います。そうなってきた時にどこで個人の差がつくのか。私は「やり切る力」という部分だと思います。知識は得られる、課題解決の提案までＡＩがしてくれる、ただ、答えが分かっていても、それをやり切れるかどうかというところは個々の意思と習慣によるものなので、必ず差がつきます。ですので、子どもたちにはとことんやりぬくという意味で、邁進して欲しいと思います。「知ってる」と「できる」は違いますし、「できる」と「続ける」は更に違います。岩村さんもまさに努力を積み上げて世界のトップを獲られた方です。こういうことを子ども達に感じていただきながら、積み上げること、努力していくことの大切さが伝われば嬉しいです。

芝田:続きまして岩村様、いかがでしょうか。

岩村:そうですね。純粋に子どもたちには子どもらしさを取り戻してほしいなっていうのは、まず一つあるんです。でも、その子どもらしさってどこだと言われても、今の子どもたちはなかなか理解するのが難しいかもしれません。外で遊ぶことも含めて、なにか自分がやりたいことを一生懸命必死になってやり続けると西田さんもおっしゃられましたけど、続けることや継続させることって何でもいいと思うんです。それは勉強もしかり、遊びもしかり。ただ、やり続けることでいいと思うし、一つのことに没頭するということってすごく大事なことだと僕は思ってます。何でもいいのでいろんな趣味をもつのも大事だし、直近で言うと、野球界ではＷＢＣという大きな大会がありました。大谷選手や多くの選手たちの活躍の根底にあるものは、あの選手たちの幼少時代にどういうことをやっていたかという部分にあると思うんです。大谷選手は同じ東北の出身だということもありますから、身近に感じてもらいながら福島の子どもたちもあんな風にスター選手になれる可能性は決してゼロではないと感じてほしいです。野球界の中だけじゃなくて、夢の話ではなく良い意味での勘違いをして、自分ももしかしたらできるんじゃないかっていう可能性を信じて、可能性がある限りなにか一つのことに没頭してほしいなと思います。さらに言うと、根本的に必要なものは、もっと周りの大人が子どもらしさを発揮できる環境を作ってあげる必要があるのではないかと思っています。

芝田:環境を作るという点で私たちは、郡山で多くの子どもたちに、様々な選択肢をもって欲しいと考えております。プロ野球選手であったり、プロバスケットボール選手、さまざまな将来の選択肢、可能性をもてる地域にしたいと考えて運動しております。本日は対談という形でお時間をいただきましたが、今後もお互いに連携を取りながらより良い郡山を作っていきましょう。それでは対談を終了とさせていただきます。本日は実りある対談となりました。誠にありがとうございました。

※紙面の都合上掲載はここまでとさせていただきます。対談の全内容は特設ページにて掲載しておりますのでそちらをご覧ください。

対談特設ページQR

福島ファイヤーボンズQR

福島レッドホープスQR

プロフィール

岩村　明憲氏　プロフィール

愛媛県宇和島市出身。宇和島東高校時代二年生から全日本高校選抜の四番を務め、一九九六年ドラフト二位でヤクルトスワローズに入団。二〇〇六年は第一回ＷＢＣの日本代表に選出され、第一回大会優勝に尽力。二〇〇七年にタンパベイ・デビルレイズへ移籍、二〇〇九年も二大会連続でＷＢＣの日本代表に選出され大会二連覇、その後パイレーツ、アスレチックスでプレーし、二〇一一年に日本に復帰後は楽天、ヤクルトで活躍。二〇一五年からBCリーグに新規参入の福島ホープスの選手兼任監督に就任。現在、二〇一七年九月の引退試合をもって選手生活を終え、福島レッドホープス監督兼オーナーとして精力的に活動中。

西田　創氏　プロフィール

福岡県福岡市出身。東福岡高校時代に全国高校ラグビー準優勝、立教大学ではラグビー部主将を務め、同行初のトップリーグ選手となる。引退後にＮＥＣで官公庁業を二年間務めつつ、母校ラグビー部ヘッドコーチに就任。組織マネジメントへの課題感から識学に出会い転職。二〇二〇年福島ファイヤーボンズの運営に参画。翌年五月より代表取締役社長となり、スポーツの力で「誇れる福島」をつくるべく活動している。

新年会

一月十六日(月)、郡山ビューホテルにて「公益社団法人郡山青年会議所二〇二三年度新年会」が開催されました。

はじめに、郡山青年会議所　理事長芝田 銀平 君が新年の挨拶とともに、本年度スローガンである「Challenge a new era, and change the future! ～新しい時代に挑戦しよう、私たちが夢描く最高の未来へ～」に込められた想いを述べ、新しい時代に挑戦し郡山の未来のために全力で邁進していく決意を表明いたしました。

当日は、多数のご来賓の皆様のご出席を賜り、福島県知事 内堀 雅雄様　代理 福島県県中地方振興局局長 中嶋　博様、郡山市市長 品川 萬里様、郡山商工会議所会頭 滝田 康雄様　代理 副会頭 今泉 守顕様よりご祝辞を頂戴した後、郡山芸妓連の皆様による祝舞鏡開きと続き、(公社)日本青年会議所東北地区福島ブロック協議会会長 金子善弥君のご発声で乾杯となりました。

本年度は新型コロナウイルス感染症対策を行いながら実地開催とし、郡山青年会議所二〇二三年度役員紹介が行われ終始和やかに会が進み、郡山青年会議所ＯＢ会会長 湯浅 大郎様のご発声により中締めとなりました。

年始のご多用中にも関わらず、多くのご来賓、県内各ＬＯＭ、郡山青年会議所ＯＢ会の皆様にご出席賜り二〇二三年度郡山青年会議所を力強く発信することができ、現役会員一同、決意を新たにすることができました。

京都会議

一月二十日(金)から一月二十二日(日)にかけて「公益社団法人日本青年会議所二〇二三年度京都会議」が二〇二〇年度ぶりに実地開催され、我々郡山青年会議所からも多くのメンバーが参加しました。

一日目は、郡山青年会議所から橋本直樹君が委員として出向している財政審査会議を訪問しました。また、久保田雄大君が副委員長、土屋 繁太郎君が小幹事、菅 洋滋朗君が委員として出向している地球環境委員会を訪問し、第一回委員会では、サマーコンファレンス２０２３での担当するファンクションへ向けての話し合いなどがあり、出向している各メンバーの真剣に取り組む姿勢に我々も背筋が伸びた緊張感ある委員会となりました。

この後は、日本青年会議所東北地区協議会の会員会議所会議に参加しました。

東北青年フォーラム主催主管締結式では主管ＬＯＭである北上青年会議所が多くのメンバーでＰＲに参加して盛り上げており、二〇二一年に主管ＬＯＭであった我々もまた当時の決意を新たに二〇二三年度に向けて挑もうと感じました。

その後、京都会議東北地区ナイトが開催されましたが、新型コロナウイルス感染防止対策の観点から入場制限があり郡山青年会議所からは芝田理事長と阿部専務理事のみの参加となりました。

二日目は、【国際＆地域フォーラム】、【国家フォーラム】、【組織フォーラム】へ参加し、メンバー一同夢や困難も諦めない勇気を改めて思い出す機会となりました。

その後、姉妹ＪＣとなる奈良青年会議所の皆様に設えいただきました合同ＬＯＭナイトが開催され懇親を深めました。

三日目は、新年式典へ参加し、(公社)日本青年会議所 第七十二代会頭 麻生 将豊 君が本年度掲げる基本理念を述べ、ウクライナの戦争で起こっている世界情勢と日本の現状、そして日本青年会議所の現状と本年度の試みを熱く語りました。

「単年度制の我々は、結果を出すことだけに執着してしまい本当に求めていた夢を諦めてしまったのではないか？」

「リーダーを作る団体のはずなのに、人に口ばかり出すマネージメントのようなことばかりをしているのではないか？」

「何かに妥協して、何か言い訳を作って、自分で自分自身に壁を作ってしまっては自分の成長はもとより夢など叶うはずがない、青年を名乗っている以上、青年以上に青年らしく我武者羅に運動と事業をつくりましょう」と語られ、会頭の想いを、京都会議を通じて共有することができました。

一月例会並びに定時総会

一月三十日(月)、郡山ビューホテルアネックスにて「公益社団法人郡山青年会議所二〇二三年度一月例会・定時総会」が開催されました。

例会では、第六十三代理事長芝田 銀平君が「Challenge a new era, and change the future!～新しい時代に挑戦しよう、私たちが夢描く最高の未来へ～」のスローガンのもと二〇二三年度の運動・活動にかける想いを述べられました。そのなかでWEBを活用した活動は継続しつつも、同じまち、同じ目的をもった青年同士、直接顔を突き合わせてのコミュニケーションの重要さを述べられ、アフターコロナという新しい時代へ挑戦し、所信に基づき人々を巻き込み運動・活動を展開していくことをメンバーに呼びかけました。

続いて会務報告、出向者報告では各委員長、各出向者より本年度の決意について発表があり、その後新入会員への入会許可書の授与と自己紹介が行われました。

一月定時総会ではOB会会長湯浅 大郎先輩よりご挨拶いただき、定時総会開催の祝辞と二〇二三年度の活動への激励のお言葉を頂戴いたしました。

議長に土屋 繁太郎君、副議長に紀乃 知佳君が選出され、議事はつつがなく進行され、全議事が無事承認されました。

総会の最後に理事長芝田 銀平君より二〇二二年度理事長の久保田 雄大君に感謝状が贈呈され、久保田雄大直前理事長より二〇二二年役員を代表して御礼が述べられました。

この総会をもって二〇二二年度全ての運動・活動が終了し、私たちが夢描く最高の未来へ向けた二〇二三年度体制の挑戦が歩みを進めました。

新春のつどい

二月三日(日)、白河の地東京第一ホテル新白河にて福島ブロック協議会二〇二三年度新春のつどい」、「第五十三回ブロック大会主催主管締結式」、「アカデミー委員会開校式」、「会員拡大セミナー」、「大懇親会」が開催されました。

二〇二一年度、二〇二二年度と新型コロナウイルス感染症の影響で実地開催が困難となり、今年度は実に三年ぶりの開催となりました。

新春のつどいでは、本年度福島ブロック協議会会長である金子 善弥君が「誰もが誇れる故郷の創造～福島をヤバくする～」のスローガンのもと事業計画を発表し、各委員や、各地青年会議所からの事業計画発表が続き、その後、役員紹介が行われました。

当団体から顧問として出向しております柳沼 勝恵君、県南エリア担当副会長として出向しております織田 陵平君が紹介され、芝田 銀平理事長より「Challenge a new era, and change the future!～新しい時代に挑戦しよう、私たちが夢描く最高の未来へ～」のスローガンに込めた想いを力強く発信しました。

第五十三回福島ブロック大会in猪苗代主催主管締結式は滞りなく調印され、主管するJCI猪苗代よりブロック大会テーマである「リジェネラティブ」のもとPRが行われました。

アカデミー開校式では、郡山青年会議所から出向しております織田 陵平君より『It's アカデミー♪ ～想いを、その先へ。～』というスローガンのもと、多様性というテーマを二本の大きな柱として掲げ、アカデミー生である髙橋 祐樹君、石黒 恵太郎君が青年会議所の価値や多様性について学んでいきたいと力強く決意を述べました。

会員拡大セミナーでは、「LOMをヤバくする！会員拡大セミナー」の名目で平下 茂親先輩、鈴木 一成先輩のお二人を講師とし会員拡大とは何なのか。なぜ拡大が必要なのか。をディスカッション形式でご講演頂きました。参加者の会員拡大に対する意識を改められたセミナーとなりました。

その後開催されました大懇親会では、総務広報委員会委員として出向しております杉島 健太君が司会を務め、東北青年フォーラムin北上のPRやJCI猪苗代の周年事業のPRがあり、最後に全員で「若い我等」を合唱し閉会となりました。

福島県内各地の青年会議所メンバーと変わらぬ絆を再確認し懇親を深めました。

二月例会

二月二十日(月)郡山市公会堂にて「公益社団法人郡山青年会議所二月例会」が開催されました。

理事長挨拶では青年会議所がどのようにして結成されたか説明いただき、何故例会を行うのか述べられました。

例会を行う理由として大きく分けて三つの意味合いがあり、

一、目標の達成をするために運動・活動の内容を再確認し、メンバーの意識統一を図るため。

二、例会は全ての事業のベースと言われているので、各事業のトレーニングとして行う。

三、メンバー全員へ学びの機会を提供する場として。

と説明をいただき、毎月行われる例会の必要性を改めてお話いただきました。

その後、各委員会の会務報告、各出向者の出向者報告が行われこれまでの運動・活動の内容が会員へ情報共有されました。

三月からは、各委員会が昨年から温めていた事業が続々開催されていきます。新しい時代へ挑戦するスタートの起点としてメンバーの想いを共有する例会となりました。

今月から広報渉外委員会が行った一、二月度フォトコンテストの結果が発表され、それぞれの受賞者が喜びを露にしておりました。

グッドスマイル賞
柳沼 勝恵 監事

育LOM賞
山本 将司 室長

月間事業賞
紀乃 知佳 委員

新入会員オリエンテーション並びに現役会員向けセミナー

二月二十五日(土)から二月二十六日(日)にかけて磐梯熱海温泉ホテル華の湯にて、「二〇二三年度新入会員オリエンテーション並びに現役会員向けセミナー」が開催されました。

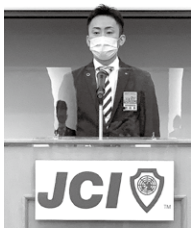
開校式では、新たに入会した新入会員への入会許可書授与式を行いました。

基礎研修では、矢吹瞬副理事長が「JCの基本理念、JC運動、三信条について」、佐久間悠治副理事長が「郡山青年会議所の歴史と伝統並びにその活動内容について」、阿部圭祐専務理事が「用語・定款・諸規定について」、織田陵平副理事長が「(公社)日本青年会議所並びに出向について」としたテーマで講義を行いました。

その後、二〇二三年度の各室長と各委員長が本年度の事業説明と委員会紹介を行い、「二〇二二年度最優秀JAYCEE賞受賞者」の佐久間郡君が体験スピーチを行いました。

次のセクションでは、「二〇二二年度優秀新人賞受賞者」の石黒恵太郎君、紀乃知佳君、菅洋滋朗君が新入会員時の体験や二〇二三年度の新入会員へ「大変だったけど、楽しんで一年間を過ごせました。皆さんも楽しんでください！」とメッセージを含め体験談をお話いただきました。

理事長講話では、芝田銀平理事長が新入会員に対し、理事長所信や新入会員時の経験や今までの経験などをお話しされ、現役会員は各グループに分かれ「効率化してほしい面がある」という題でバズセッションを行いました。題は組織内で先行して実施した実情アンケートをもとに設定しました。グループごとに効率化するべき所とするべきでは無い所など様々な意見が飛び交いました。これらの意見を集計し、協議、見定めた結果を組織に落とし込む必要があると強く感じました。



その後、江津青年会議所OBで二〇二一年度(公社)日本青年会議所組織グループ拡大委員会委員長を務められました平下茂親先輩をお招きし「青年会議所でできること～理念とみんなの未来を考える～」と題しご講演いただきました。講演中のグループワークを通して、新入会員だけでなく現役会員も「目的」と「目標」の違いを明確に立て分けて行動する必要性を学びました。また、理念とは本来あるべき姿を指すことだと学びました。

また、新入会員による三分間スピーチでは、様々なお題に苦戦しながらも、自分なりの考えをまとめ上げ、それぞれのお題に対する考えを語りました。

湯浅大郎OB会会長をはじめとする、立田尚幸先輩、山口松之進先輩、幕田宙晃先輩をお招きして開催された「青春の居酒屋」では、現役当時のお話しなどを伺い、新入会員には多くの激励をいただきました。

翌朝は、新入会員がJC宣言文と綱領の確認テストを行い、緊張感に満ちた会場の中、全員が合格することができました。その後、新入会員による決意表明が行われた後に、修了証書が一人ひとりに授与され、閉校となりました。

東北ゼミナール特別委員会開講式

三月十一日(土)、宮城県仙台市の錦ケ丘アーリー迎賓館にて、「公益社団法人日本青年会議所東北地区協議会二〇二三年度東北ゼミナール特別委員会開講式」が開催されました。

東北ゼミナール特別委員会は二〇二〇年を最後に約三年ぶりの設置となり、開講式では、東北地区協議会二〇二三年度会長高橋隆太君から「将来は各地青年会議所を担う中心的な人材になって欲しい」との挨拶もいただきました。

当団体からは圓谷紀幸君が出向しており、当日は芝田理事長をはじめ多くの現役メンバーで応援の為に現地に駆け付けました。

開講式終了後、講師に大嶋啓介氏をお招きし、「夢を持てば人は輝く～夢は必ず叶う～」のテーマのもとでグループディスカッションも織り交ぜた講演が行われました。終始和やかで笑いが多い講演会でしたが、参加されているメンバー一人ひとりが地域に対する課題や夢について熱く語り合い、『経営者(リーダー)のメンタルですべてが変わる』という言葉が特に印象的で、これは自分の会社に置き換えても地域を兼任するリーダーとしても大切なことだと胸に刻みました。

当団体の未来へ、そして地域をつなぐ先導者となるべく二〇二三年度ゼミナール委員会の幕が上がりました。

JC説明会

三月十日(金)持続可能な組織開発委員会が郡山青年会議所事務局において、二〇二四年度新入会員候補者へ向けてJC説明会を開催しました。

説明会は年間で三回の開催を予定しており記念すべき最初の開催となりました。今回は計六人の候補者の皆様に参加していただきました。

説明会ではまず参加していただいた候補者へ向け芝田銀平理事長より挨拶があり、その後大越惇平委員長がスライドを用いてJCとはなんなのか、入ることでのメリット、デメリットを重点的に講話していただきました。

これは、不十分な情報や知識の状態で入会意向が確定されることを防ぎ、また入会に後ろ向きである候補者の方には「一度でいいのでJCについてしっかりと理解をしたうえで、「入会の是非」を判断していただきたい」という熱意ある想いのもと行われた説明会でした。

現役メンバーも多数参加し終始笑顔がこぼれる穏やかな雰囲気で会は進行しました。

我々現役メンバーも説明会を一緒に受け改めて原点を思い出す良い説明会になりました。

カーボンニュートラルセミナー

三月二十日(月)、郡山市郡山公会堂にて「カーボンニュートラルセミナー～郡山の現状とこれから～」と題して、二部構成の講演会が行われました。

第一部では、郡山市長の品川 萬里 様にご講演いただきました。

郡山市がSDGs未来都市に選定された事で、環境未来都市を目指した経緯や取り組みを中心にお話をいただきました。郡山市が抱える課題と照らし合わせながら様々な問題解決のためにはまず気候変動問題について取り組む必要性をお話しされ、日本青年会議所でも推進しているベビーファースト運動について郡山市の取り組みも語っていただきました。

第二部では、環境政策課課長 渡辺 雅彦 様よりご講演いただきました。

郡山市の気候変動対策を中心にお話いただき、温室効果ガス排出量が近年減少傾向にあるとの事でしたが、まだまだ予断は許されず引き続き対策が必要であるとのことでした。そのために市民、行政、事業所各々との連携が必要であるとお話いただきました。

また、郡山市はゼロカーボンシティ(二〇五〇年には二酸化炭素排出量を実質ゼロにすることを目指すと宣言した地方自治体のこと)として、脱炭素社会の実現とSDGs未来都市としての取り組みを加速化しているとのお話でした。

今回の講演会を通して、二〇二三年度のまちづくり運動や、さらなる地域活性化に向けメンバー一丸となる多くの気付きや学びがありました。

理念共感セミナー

三月二十五日(土)郡山市労働福祉会館大ホールにて、「学校の「当たり前」をやめた。―生徒も教師も変わる!」や「自律と尊重を育む学校」などの著書で知られ、現在も横浜創英中学・高等学校の校長として教育現場に身をおく工藤 勇一氏をお招きし「工藤 勇一 氏講演会『社会の変化とこれからの教育～自律と対話～』」と題したテーマで一般の方々も受けられる講演会を開催しました。

事前予約の段階で満席となった大ホールで行われた講演会では、社会の変化に対し我々はどうあることが望ましいか、工藤先生が教育現場で培われた知識とご経験を基にご講演いただきました。

どうすれば、現状の日本が抱えている課題を解決し、子ども達にとってより良い学校教育になるのか?ということについて、子を持つ親として、社会の中で生きるものとして、改めて考えるきっかけとなりました。

与える教育ではなく、大人が手を引きつつ子どもの自己決定を見守り導くことが重要であり、主体的に行動、自己決定を積み重ねることで自己肯定感を高めることができるということを学びました。

工藤先生の講演を聞き子どもの教育現場だけでなく、社会の中にあるあらゆる組織や団体などでも活かせる考え方を学ぶ貴重な経験となりました。

三月例会

三月二十七日(月)郡山市郡山公会堂にて「公益社団法人郡山青年会議所二〇二三年度三月例会」が開催されました。

理事長挨拶では理事長 芝田 銀平君よりこの一ヶ月の事業を振り返りつつ、運動についてメンバーに呼びかけられました。

「運動(movement)とは、特定の人や集団の考え方や行動を変えるための行動を指し、決して人を集めることや結果に賞賛を得ることが目的ではない。委員会メンバーだけで行うのではなく、多くのメンバーや市民や団体を巻き込み、変革の起点として人々の考えや行動を変える運動をお願いするとともに、新しい時代に挑戦し今までの時代を変えていこう」と強い想いを述べられました。

その後、各委員会の会務報告や、各出向者からの出向者報告が行われました。

三月度のフォトコンテストの結果が発表され、それぞれの受賞者に賞が贈られました。

春となり気候も暖かくなり、私たちが夢描く最高の未来へ向けて、メンバーが意識を共有する例会となりました。

グッドスマイル賞　佐藤 研一 委員
育LOM賞　佐久間 悠治 副理事長
月間事業賞　阿部 圭祐 専務理事
特別賞　遠藤 典宏 副委員長
紀乃 知佳 委員

第六十二回「久米賞・百合子賞」第一回 実行委員会

四月二十四日(月)、郡山市役所本庁舎五階教育委員会室にて「第六十二回久米賞・百合子賞」第一回実行委員会が開催されました。

当日は、郡山市文化スポーツ部文化振興課、郡山市教育委員会学校教育部学校教育推進課、公益財団法人郡山市文化・学び振興公社、郡山市中学校教育研究会国語部会の代表者の方にご出席いただき、開催要領や実行委員会規約、募集方法・期間、審査員、年間スケジュール、予算など、年間の運営方針について協議が行われました。

本年で六十二回を迎える「久米賞・百合子賞」の歴史と伝統を引継ぎ更なる発展へと繋げていくことを確認し合い、閉会となりました。

四月例会並びにチェリーパーティー

四月十九日(水)、公益社団法人郡山青年会議所二〇二三年度四月例会並びにチェリーパーティーが郡山ビューホテルアネックスにて開催されました。

理事長挨拶では、公益社団法人として十年が経過した今だからこそ抱える財政上の問題や資質向上の課題、どの様に会員拡大を行っていくのかといった点についてお話がありました。

白河の地で行われた会頭公式訪問にて得られた「会員拡大はOB会員の協力無くして達成できない」との金言に触れ、OB会員と交流できる場であるチェリーパーティーでは、会員拡大に繋がるよう積極的に交流をはかってほしいと述べられました。

その後は新入会員の山口 ひろみ君への入会許可書授与式、四月度フォトコンテストの結果が発表されました。

四月例会後は、毎年この季節に郡山青年会議所OB会の先輩方との交流事業として開催されるチェリーパーティーにて、OB会会員の先輩方から様々な教えを賜る大変有意義な時間を過ごすことができました。

会の後半には、新入会員である太田 雅一君、山口 ひろみ君が、先輩方の前で緊張しながらも改めて自己紹介と抱負を述べさせていただく機会をいただきました。

OB会員と現役会員がパーテーションを取り払って交流できた本事業は、コロナ禍の終わりを象徴するような、桜咲く季節の到来を参加者一同で感じられる機会となりました。

グッドスマイル賞　斎藤 一紀 委員
育LOM賞　紀乃 知佳 委員
月間事業賞　伊藤 裕之 委員
特別賞　矢吹 瞬 副理事長

第五十八回 郡山市こどもまつり

五月五日(金・祝：こどもの日)昭和四十一年、(社)郡山青年会議所が立ち上げ、本年で五十八回を迎える「郡山市こどもまつり」が郡山カルチャーパークにて開催されました。

地域の都市化に伴う遊び場の減少やスクリーンタイムの増加により子どもたちを取り巻く生活環境が変化している中、「郡山こどもまつり」を通じて子どもたちが安心して体を動かし様々な経験や学び、家族のふれあいの場を創出するために郡山青年会議所も参加してきました。

「がくとくん・おんぷちゃんのハートにとどけ！的あてゲーム」、「ワクワクSDGs迷路」、「郡山青年会議所PRコーナー」と題し、こどもが家族と笑顔になるような設えを行い、郡山青年会議所が地域の未来を担う子どもたちの可能性の幅を広げる一助となることができました。

twitter　Instagram　JCI_KORIYAMA　Facebook

2023年度 SNSも新しくなりました！
是非フォロー＆ご一読よろしくお願い致します。

皆様のお声をお聞かせ下さい!!

アンケートQRコード

私たちはこれまでに様々な広報誌を発刊してまいりました。今後、今まで以上にこの広報誌を盛り上げ、私たちの事業運動・活動を知っていただきたく存じます。そのために、今後私たちの運動・活動の参考とするべくアンケートを実施させていただくこととなりました。大変お手数なことかもしれませんが、アンケートの記入にご協力をいただけましたら幸いでございます。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

広報渉外委員会
委員長　堀川 武尊

新入会員紹介

㈱川口タンス店
太田 雅一

福島民報社
山口 ひろみ

NO・609号　●発行所事務局　福島県郡山市中町5－17　中町スペース3F　電話024-932-2289
公益社団法人郡山青年会議所　●発行責任者／理事長　芝田　銀平　●編集責任者／広報渉外委員会委員長　堀川　武尊
※無断転載禁止